

この半年間で私たちが気づいたこと

地球規模のパンデミックの中で、今日、前期終業式を迎えています。

3月に突然全国一斉休校になり、兵庫県の学校再開は6月でした。学校再開の日、生徒のみなさんが学校に足を運んでくれるか正直心配でした。ですから、登校してくるみなさんの元気な顔を見たときは、本当に嬉しく思いました。その一方で、電車での通学や学校での集団生活に不安を持っていた生徒がいることも知っていました。しかし、私たちは今、「新しい生活習慣」を受入れることで、少しずつ日常を取り戻しつつあります。

この半年間は、世の中の当たり前を問い直す期間でした。例えば、「学校」についてです。普段は、「毎日、学校に行くのはしんどいな」「臨時休校になって、ラッキー」と思っていた人も、やがて「ひとりで勉強するのは大変だ」「友だちはどうしているかな」「先生に話を聞いて欲しい」など、当り前の日常がなくなって改めて、自分にとっての「学校の意味」や「学校への期待」を考えることができたことは、災難の中にあって、よい意味での気づきだったかも知れません。

また、この半年間は、これまで見えていなかったことがはっきりと見えてしまった期間でもありました。例えば、新型コロナウイルスに感染した人や感染の疑いがある人、その家族らへの冷たく厳しいまなざしや誹謗中傷の声です。普段は穏やかなよい人が不安や恐怖に駆られると、いとも簡単に人を排除し、差別してしまう例を、私たちはテレビや新聞でいくつも見てしまいました。

そんな人間の弱さを知ること、自分は同じことをしていないか、人の痛みや悲しさを感じることができているか、人を追い詰めていないか、を振り返ることが出来ます。また、つらく苦しい気持ちを抱えている人に対して、自分ができることを考え、行動することも出来ます。

私たちはこの半年間で何に気づいたのか、その気づきを自分の成長やまわりの人の幸せに結びつけることができないかを考えつつ、後期を迎える心の準備をして欲しいと思います。

10月には後期入学生と一緒に、また新しいスタートラインに立ちましょう。

令和2年9月25日

兵庫県立西宮香風高等学校長

石川 照子